

夜のパパと ユリアのひみつ

マリア = グリーペ 作

大久保貞子 訳



作者／マリア＝グリーベ

1923年，ストックホルム生まれ。1954年のデビュー以来，ユニークな作品を書き続け，現在スウェーデン児童文学を代表する作家の一人。ニルス＝ホルゲンセン賞，リンドグレーン賞などを受賞。

訳者／大久保貞子

1932年，東京生まれ。お茶の水女子大学英文科卒業。1966～67年，コペンハーゲンに留学。「忘れ川をこえた子どもたち」（富山房）で，旺文社児童文学翻訳賞を受賞。

夜のパパとユリアのひみつ

©Sadako OHKUBO 1983

作者 マリア＝グリーベ

訳者 大久保貞子

発行 1983年1月初版1刷

発行者 今村廣

発行所 東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3-5 備成社

印刷 中央精版印刷・小宮山印刷

N.D.C 949 230p 19cm

ISBN4-03-726200-2

Published by KAISEI-SHA, Ichigaya Tokyo 162

Printed in Japan.

落丁本・乱丁本はおとりかえします。

夜のパパと ユリアのひみつ

マリア=グリーペ作 大久保貞子訳



JULIAS HUS OCH NATTPAPPAN

by Maria Gripe : illustration by Harald Gripe

© 1971 by Maria Gripe : ill. by Harald Gripe

Originally published by Albert Bonniers Förlag, Stockholm

Japanese edition published by KAISEI-SHA Co., Ltd 1983

by arrangement through Tuttle-Mori Agency, Tokyo

義丁・カット ハラルド＝グリーベ





Ⅰ ペーテル

このまえユリアといっしょに最初の本を書くことになったとき、ぼくはなかなか書きだせないでいた。

「きまつてるじゃない。一ばんはじめから書けばいいのよ！」

とユリアはいったが、どうしようもない。するとユリアは、くいさがったものだ。

「ものごとはじめや終わりなんて、ほんととはだれにもわかりやしないわ。だから、とにかくはじめればいいの！」

あの本は、まずユリアから書きだした。こんどは、ぼくの番だ。それがいい。ユリアは今回なぜか、しぶっている。一行でも書いてくれるかどうか、あやしいものだ。

「あたし書けない」などといってるし……。まったくおかしな子だ。このまえはあんなに熱心だったくせに。

ひょっとしたら、ぼくに説得せつとくしてもらいたくて、それで

わざと書きたくないふりをしているのかな？ 自分では気づいてなくても、本心とちがう態度をとるのは、よくあることだ。このぼくにだって、何回か、おぼえがある。たとえば、「石について講演していただけませんか？」と電話がかかってきても、ぼくはときどき、だめです、とすぐことわる。むこうがあきらめて電話をきり、それ以上しつこくせがまれないと、いちおう、ああよかったと思う。だが、あとになんともなくものたりない気ぶんがのこり、なにかをなくしてしまったような感じがする。

ぎゃくに、ぜひぜひとたのみこまれて、ことわりきれずにひきうけたときは、ため息をついてぶつぶつこぼすくせに、いよいよその日がきて石の話をはじめたとたん、O・Kという気ぶんになる。そんなときだ、「だめです」とはじめてことわったのはぼくの本心ではなく、そのふりをしたにすぎないとさとするのは。

ふしぎなことに、せがまれてひきうけた話だと、石が、いつそうたいせつなものに思えてくる。石に興味をもつ人が自分のほかにもおおぜいいるんだと、わかるからかもしれない。ま、ときにはこんな経験もあっていい。

いまのユリアも、たぶんそんなところなのだろう。じっさいに書きだすまえに、書くことの

だいじさをたしかめておきたいんじゃないかな。そんな心の準備もいいだろう。ぼくは賛成だ。このまえとはちがうんだから。このまえユリアは、ぼくの存在を証明したくて本を書くことになったのだ。

あのころユリアの友だちは、ぼくのことを、まったくのつくり話だと思っていた。

「夜のパパなんて、ほんとのパパのはずないわ。」

そういわれて、ユリアは考えたのだ。ぼくとユリアのような親子もいることを、なんとかしてみんなに知らせたい。お父さんとお母さんと子ども、というふうの家族ばかりじゃない、ってことを知ってほしい。ほんとうの事情がわかったら、みんなの態度がもうすこしましになって、いまみたいにいじわるばかりされなくなるだろう。そう思ったのだ。あの本を書いたあと、はたしていじめられなくなったかどうか、ぼくにはよくわからないが……。

ぼくがつくり話でないことははっきりしたようだけど、それもどうやら、ぼくのことを新聞にのってかららしい。何人かの親が、子どもにこういったそうさ。

「あら、ごらん。ユリアの夜のパパが、きょうの新聞に出てるわよ！」

子どもは親の声の調子から、新聞に写真が出るのはたいしたことだとうけとったのだ。新聞

にのるなんてすばらしい。俳優や政治家や、いろんな有名人なみだ——そう思っている人は、おおぜいいる。こんなふうに新聞をのぞいたあとで学校へいったら、同級生たちの目には、ユリアがつんと氣どっているようにうつた。ほんとは、ぼくが新聞にのったことなど、ユリアはぜんぜん知らないのに。

「じまんやさん！ あたしはえらい、って顔してるのね。わあ、いやだ。」

みんなは大声でいいたてる。たちまち学校じゅうにうわさがひろまり、ユリアはぼくのことをじまんしていばっている、と思われてしまう。しかしユリア自身は、なんにも知らないのだ。ほんのすこしも。

「いったいあたしが、なにをしたっていうの？」

そうきくと、みんなはいう。

「あーら、かくさなくてもいいわよ。知ってるくせに！」

二どと氣どったまねをさせてはならない、ユリアのじまんの鼻をへしおってやろう、とみんなは考え、実行にうつした。こういうことになる、いつもたいした熱のいれようだ。

だが、親にはないしょにしていた。ときどき新聞にのるような、えらい夜のババをもつユリ

アをいじめたなどと親に知れたら、おこられるかもしれないから。

ユリアのほうも、ママにはなにもいわなかった。いつもいつもユリアひとりがみんなを敵にまわしているなんて話すのは、すごくいやだったのだ。自分にもどこかいけないところがあったのだらうと、ユリアは思っている。

結局、本を書いたあと、つらいことがへったのかどうか、そこまではぼくにもわからない。

しかし、だからこそ書くべきことがいろいろある、といえるかもしれない。口で話すより書いたほうがいいことは、たくさんある。ユリアもそういつていた。

たとえば、こんどのうわさにしても……もしほんとうだとしたら、ここはいったいどうなるのだらう？

あのうわさがほんとうとは、思えない。こんなにきれいな昔からの家を取りこわして、美しい庭までつぶす、などというばかなことを、だれがするだらうか？ この家は、市内のこの地域にただ一つのこされた美しい建物といえる。だが、金がからんでくると、とたんに、とんでもないことが起こるものだ。いまある家のかわりに大きなアパートでもできて、もっとおおぜいの人々が住むようになれば、かなり値うちが出るわけだし。

ここの持ち主は市だ。そんな計画があるのなら、なぜまえもって、住んでいる人たちと話しあいをしていないのだろう。まったくなにもいってこない。話す機会があれば、ユリアのママはなにかいったにちがいない。ママがなにも知らないことは、はっきりしている。

ユリアもまだ、うわさ話を耳にしていけないようだ。子どもというものは、いろんなことをかぎつけるのがとくいなはずだが。とにかく、へ火のないところに煙はたたない——ここはひとつ、ぼくがのりだして、真相をしらべなくては……。先週、この近所をうろついている連中がいたが、たぶん、なにかをききこんで、やってきたにちがいない。

あの日ぼくは、頭にかつと血がのぼる思いをした。男女のふたりづれがこの庭にずかずかはいりこんできて、ずうずうしくも、くりの木に手をかけはじめたのだ。家へもち帰って花びんにさすつもりだろうか、大きな枝をおりとった。庭にだれかいるとは、思ってもいなかったらしい。ぼくのすがたが目にはいると、さすがに、こまったなという顔をして、男がいう。

「建物をこわすときは、この庭だつてなくなるだろうからね。」

「そんな話は、なにもきいてませんが。」

ぼくがいうと、たちまち、ふてぶてしい態度になった。

「そりゃ、あんたとはなんの関係もないでしょうからね！」

と女がいった、つんとした。そしてふたりでバキバキと、枝をおりつづける。

そこでぼくは、そいつらを追いはらいにかかった。野蠻人やばんじんがあいてでは、話しあいもできない。はじめのうちぐずぐずしていたそいつらも、スムッゲルがバタバタとんできて、羽が頭をかすめると、ふいをつかれてびっくりしたトロル（北欧に伝わるいたずらずきの妖精）みたいに、あわてて逃げだした。

スムッゲルの大きな目でぎょろりとにらまれると、だれでも、ぞっとするらしい。りっぱに番犬の役もつとめてくれる、すばらしいふくろうだ。

はなし飼がいにしてから、スムッゲルは前よりずっと元気になった。自分の生活を楽しんでいるようすが、ありありと見える。スムッゲルにとっては、はなし飼がいのほうがずっといいのだ。それに、ぼくらとのつきあいも、とだえたわけではない。ほとんど毎日のように、ぼくのところかユリアの家へやってくる。スムッゲルは外でからだをうごかすせいか、羽がじょうぶに、しかも美しくなったし、スタイルもよくなった。

いまのところ、問題はたった一つ——スムッゲルがぼくの暮らしの手だすけをはじめたこと

ぐらいだ。つまり、遊びにくるときはたいてい、おみやげがわりにごちそうをはこんでくる。もちろん親切しんせつからもってきってくれるのだが、へごちそうへごちそうというものについて、ぼくとスムッゲルとは、少々意見がちがう。しかし、そんなことは口にだせない。スムッゲルをきずつけることなど、できるものか。

目の前のテーブルには、いまでも、野ねずみのステーキがおいてある。ぼくはいまおなががいっぱいだから、これは、あとで食べるのにとっておきたい——そうスムッゲルに納得なつとくさせたところだが、いやもう、苦心くしんした。

今回はぼくの意見をいれてくれたが、いつもそうとはかぎらない。どうしてもぼくにえさを食べさせてやらなくちゃ、とがんこに思いつめるときがあつて、ちょっとぐあいがわるい。ありがたくご辞退じたいするのだが、ひと苦労なのだ。

口をあけさせるのがむりとわかると、こんどは、ごちそうをぼくの耳につめようとする。だごこちらかんげいも、歓迎しかねる。たった一つの逃げ道は、耳せんみみせんだ。耳せんさえすれば、たいていするときスムッゲルもあきらめて、ごちそうを食べるのはあとでいいとゆるしてくれる。ただし、スムッゲルの気まえのよさにおおいに感謝している、というところを見せたくえでだけれどね。



ぼくはじっさいに、心から感謝の意をあらわしている。スムッゲルのこんな気まえのよさは、スムッゲルがいましあわせな証拠しょうこみたいなものだ。外にはなしてやるまえは、スムッゲルは自分のことばかり考えていた。世界一のエゴイストだったが、いまはすっかり変わった。

スムッゲルはいま、ぼくの頭におとなしくとまっている。自分が頭にのっていればぼくの考えごとや書きものはかどることを、スムッゲルはずっと前から知っているのだ。スムッゲルの体重は、ぼくの考えをおさえつける重しおもとして、ちょうどいい。考えがふらふらと逃げださないで、じっとしている。おあつらえむきだ。とりこわしの話は、まだひとこともユリアに

いってない。はやばやと不安な思いをさせることはないのだ。しかしここには、いまのうちから書いておこう。なにか起こりそうな、いやな予感^{よかん}がするからだ。もしも予感^{よかん}が現実のものとなったときには、いつかユリアにこれを読んでもらえれば——もし本になったらの話だが——この家がどうなったか、ようすがわかる。ぜひとも、こわされないようにしたいものだが、万一こわされてしまったら、そもそものはじめから記録をとっておいたということだけでも、不幸ちゅうの幸い^{さいわ}といえるかもしれない。あとからでは、なかなかきちんと思いだせないものだ……少なくとも、ぼくには。ユリアの記憶力^{きおくりよく}はぼくよりもいいけれど。

ぼくらはこんども、前とおなじやかたで書くことにした。つまり、あいての書いたところは、本ができあがるまで読まないでおくのだ。ユリアは、「あたし、自分の書いたところも読まないつもり。読むところなんて、一つもないかもしれないわ」などといっている。ぼくにも見当^{けんとう}がつかないが……。

窓^{まど}の外に、くりの太木が一本ある。もうだいぶ、つぼみがふくらんできた。花が咲く日も、そう遠くはなさそうだ。くりの花が咲いたら、すぐに夏……。

それにしても、あれやこれやはいったいどうなるのやら。



2 ユリア

O・K。あたしも書いてみようかな！

だって、きのう牛乳屋さんで耳にした話、いったいなんだと思う？　どこかのおばさんたちが立ち話してただけど、このあたしはもう大きいんだから、夜のババなんていらないはずだっていうの。まあ、どうでしょ！　でも、みんなの考えそうなことね。

ふつうのお父さんやお母さん、つまり〈せいぶつがくてき生物学的〉なお父さんやお母さんは、子どもが大きくなったからもう必要ない、なんてことには、ぜったいならないのよね。一生ずうっと、いていいの。なぜかっていうと、そういうお父さんやお母さんは〈きょうせいせい強制的

——たとえば夜のババなんかだと、子どもが大きくなればいらなくなるってことらしいわ！　なんてへんな考え方で